

繭玉まゆだまとお月様

陰

暦(旧暦)の正月十五日、または十四日から十六日までを小正月と言います。

今では少なくなりましたが、小正月には、豊作やその年の幸運を祈る行事が、各地で行われていました。特に十四日に多く、「繭玉」(成木もち、花もち)、「良い耳聞け」、「鳥追い」(ワァホイ)、「ドンドヤキ」などの行事が行われました。

その繭や米の豊作を祈って飾る「繭玉」にまつわる千代田町のお話です。

むかし、下志筑のある農家で、今年は繭玉祭りを

いつもの年よりも盛大にやろうことになりました。

そのためには、繭玉も立派でなくてはなりません。

梁はりにつかえるほどの大きな木を切っ

てきて、数人がかりで枝にびっしり

と小さな餅を飾りつけました。

そして、やっとできた繭玉を土間

の柱にしばりつけ、眺めてみると

薄暗い土間に、ぱっと花が咲い

たようです。

見事な出来映えに、みんな大満

足——さっそく、ごちそうが並

べられ、酒盛りが始まりました。

しばらくして、一人の男が「何だ、

ありや」と、繭玉の上の方を指差

すのです。

見ると、繭玉の木の上に、ぼん

やりと光る丸いものが出ている

ではありませんか。

「あんなところに、お月様が…。」

「お月様なら外にちゃんと出てるよ。ひよつとすると、あいつのしわざかも…。」そう言うと、男は土間に降り、ホウキでそのお月様らしきものを思いつき叩たたきました。

すると、ドスンと音をたてて、落ちてきたのは、大きな狸でした。お月様に見えたのは、何といたずら狸のおなかだったという訳です。



萬